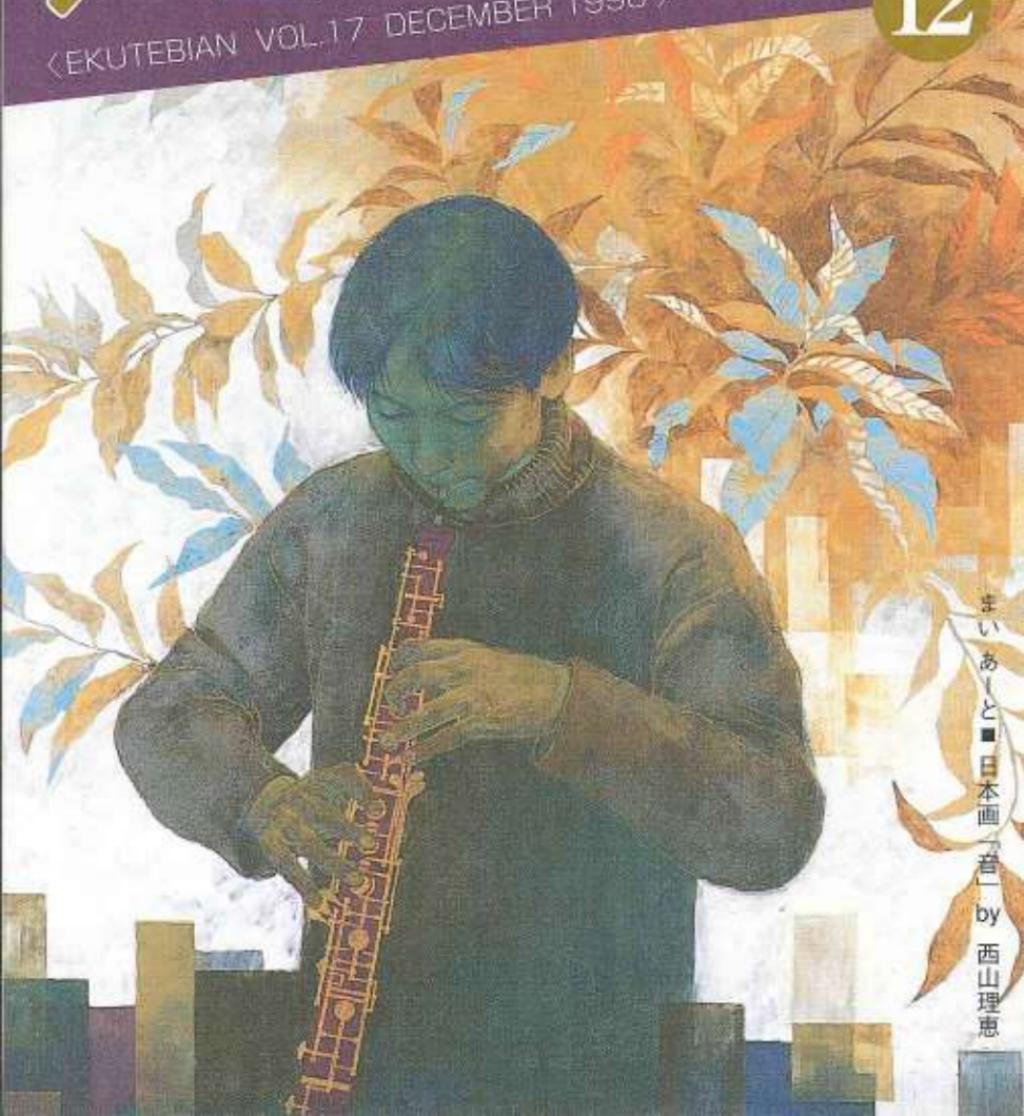
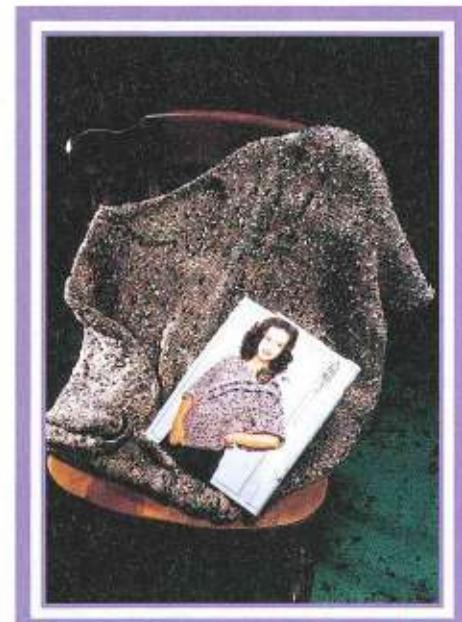
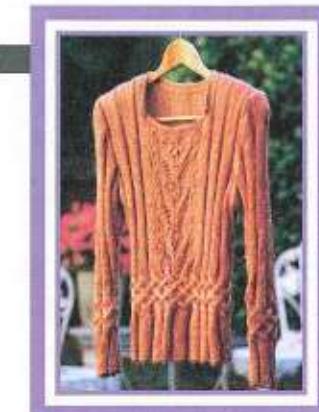
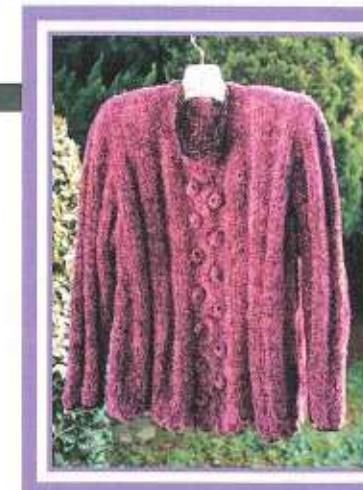
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
12
〈EKUTEBIAN VOL.17 DECEMBER 1998〉
まいあーと■日本画「音」by 西山理恵

たちかわの石仏たち⑩

山中坂の『地蔵菩薩』

昭和二十年四月四日未明、空襲警報の発令で、当時五才の私と二人の兄は、父に連れられ「山中坂防空壕」と呼ばれる壕の隣にあったもうひとつの壕に避難。父は「後で迎えに来る」と言って出ていってしまいました。身重の体に二才の妹をおぶっていた母は、我家の壕に隠れましたが、恐怖でそこに居られなくなり外に出て、低空飛行する米軍機の機銃攻撃に遭いました。母は無事でしたが、背中の妹は爆弾の破片を受け、即死しました。警報が解除された頃になり、父の迎えを待っていると、辺りは大変なことになっていました。私たちが入った壕から十数mも離れていない「山中坂防空壕」が爆弾の直撃を受け、中に避難していた四十二名全員が亡くなるという大惨事が起きていたのです。この防空壕があった場所に、現在、お地蔵さまが祀られています。四十二名の犠牲者のご供養、そしてこの悲惨な歴史を風化させせないために。

立川民俗の会　鈴木サトさん・談

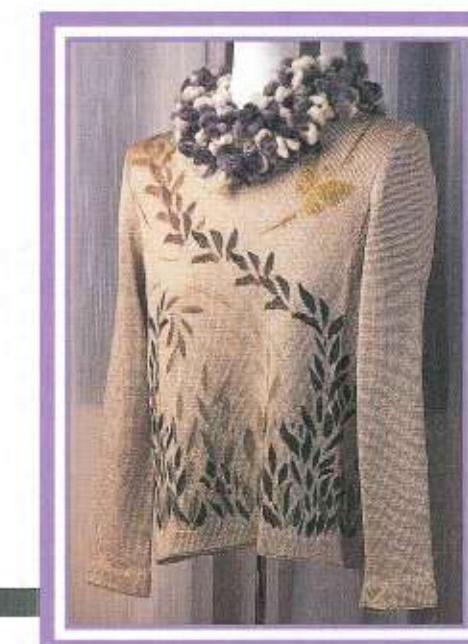
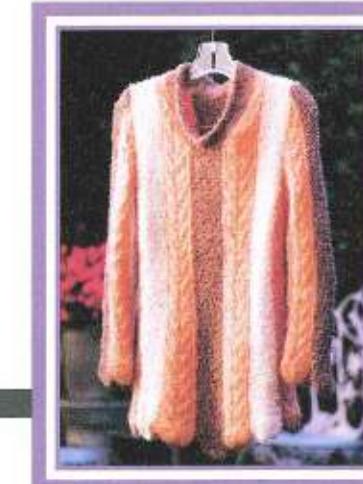
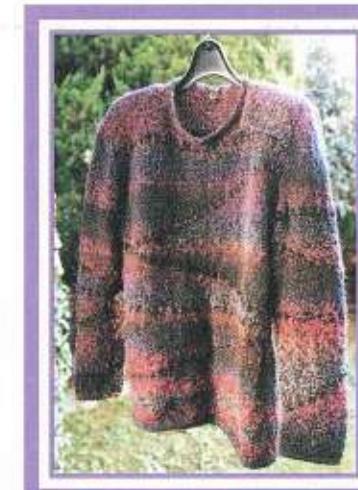
●所在地：富士見町5-25

吉川さんを囲む
『学院』の生徒の皆さん。

●えくてびあんレポート

編み針に微笑みをからめて

日本の女性の間で「趣味としての編物」が一般化したのは高度成長期の頃。
ニット・デザイナーの吉川勝子さん（柴崎町2丁目）は、その著作や雑誌、
TVなどを通じて編物の楽しさを広めた、いわば先駆けの一人である。
そのセンスと技術は『全国編物コンクール』に於て、最優秀者に贈られる
「高松宮妃賞」を、これまでに2度も受賞するという実績が物語る。
（ちなみに2回受賞は、全国で吉川さんただ一人）。
しかしこの道に出会った時、吉川さんはすでに妻であり、母であった。
家事・育児をこなし、忙しい合間をぬう創作活動だが、

「誰も犠牲にすることなく、皆がほほえめることが大事」と、その姿勢を貫いた。
ご自宅で開く『吉川勝子編物手芸学院』。
そこに集う多くの女性たちは、きっと、吉川さんという“鏡”に映る自身を確かめながら、
今日も編むことの喜びを満喫しているに違いない。

「高松宮妃賞」の盾と共に。

各誌で紹介される吉川さんの作品。独自の技法は専門誌ではひっぱりだこ。

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は曙町(B)・高松町・栄町・幸町・錦町・羽衣町のお店です。

“里山（さとやま）”にこそある 人と自然のぬくもり

〜 低山登山家・元立川九中校長 〜

守屋龍男さん

今から10年前に上梓された一冊の本。『多摩の低山』と題されたその本は、身近な小さな山に登ることによって得られる喜び、発見の魅力に満ち溢れていた。著したのは守屋龍男さん（富士見町1丁目）。今や“低山登山家”という呼称がぴったりの感がある守屋さんだが、当時は中学校の先生であった。

その後も続編を含め、守屋さんは次々と著作を発表されているが、その総てに一貫して流れているのは「教育者」としての発想であろう。ひとの心と真剣に向き合う職業に長く就いていた人が山登りを語る時、高い山への登頂・征服を目指すばかりが登山ではない、という独自の視点が生まれたとしても不思議はない。それは言い変えれば「守屋哲学」とでもいうべき、他に例のない視点である。

［プロフィール］

◆守屋龍男（もりやたつお）：昭和15年富山県出身。大学卒業後、奥多摩の中学校に理科教師として勤務。以来30数年、自然観察、登山などで奥多摩、奥武蔵、秩父、甲斐、相模・津久井の殆どの山々を歩く。昭和63年、けやき出版より『多摩の低山』を上梓。続いて『秩父の低山』、『相模の低山』を執筆。“低山登山家の守屋先生”の名は知られるところとなる。平成7年3月、立川九中の校長を最後に教職を離れ、いよいよ自然観察家としての活動も本格化。現在、登山指導、執筆活動にと多忙な日々を送っている。最新刊は今年3月に出版された『花の低山』。

◆立井啓介（たていけいすけ）：月刊えくてびあん編集人。

立井　今日は守屋先生にお会いするんで、机の上から本を持ってきたんですよ。先生の書かれた低山三部作（『多摩の低山』『秩父の低山』『相模の低山』）です。

守屋　いやあ、お恥ずかしい。

立井　これを書かれてから、もうどのくらい経ちますか。

守屋　最初の『多摩の低山』から数えると、今年でちょうど十年になりますね。

立井　もう十年になりますか。

守屋　ええ。内容もちょっと古くなってる箇所があるんで、今改訂版の準備をしてるんですよ。来春には出せると思います。

立井　僕は最初に読んだ時「低山」という発想に、まず驚いたんですよ。普通、登山を志すというと高い山を思い浮かべるものなのに、先生はその視点を変えてますでしょう。

守屋　私は「里山」が大好きなんですねえ。

立井　サトヤマ、ですか？

守屋　ええ。人の匂いがする山というか、周りに住む人たちが大事にしている山というか。それを里山って呼んでるんです。私の造語なんですが。

立井　そういえば、先生の本にはガイドばかりではなくて、そこに住む人々とのふれあいの場面がよく登場しますね。

守屋　山登りをしていて「こんな所に人家があるのか」なんてことも多いんですよ。そうすると、訪ねて話をしたくなってしまうんです。秩父の観音山、標高が三百メートルぐらいの小さい山なんですが、紅葉が見事な山なんです。そこに登ろうとした時に、途中で道に迷ってしまった。ウロウロしていたら、偶然畑に出て、畑仕事をしているお爺さんがいたんです。私が道を教わろうと声をかけたら、そのお爺さん、身を乗り出してきて「あんた、あの山がいいと思ったか。そうか、オレが案内しよう」って言い出しちゃってね（笑）。畑仕事を放ったらかしにして、歩き始めちゃったんですよ。

立井　（笑）よほど、嬉しかったんでしょうねえ。

守屋　饒舌なお爺さんでね、道々いろいろ教えてくれるんです。小さい山といっても深く入ると危険な所もありますんで、ありがたいといえばありがたかったんですが、もう八十をとうに超えているというから、こっちが心配になってしまってねえ（笑）。なんとか無事に帰ってきましたけれど

立井　元気なお爺さんですねえ。

守屋　そのことを本に書いて、その本を贈ったんですね。そうしたらお礼だと言って、自分の畑で採れたジャガイモを送ってくれましたよ。

立井　そういうふれあいは、低山ならでは、里山ならではですね。山というと、たとえば深田久彌の名著に『日本百名山』というのがありますでしょう。

守屋　ええ、ええ。素晴らしい作品ですよね。

立井　あれはあれで素晴らしいけれども、ちょっと間違うと、山登りを競争にしてしまうところがありますよね。

守屋　そうですね。幾つ登った、幾つ制覇した、という競争になってしまいます。チャレンジする気持ちは素晴らしいけれども、何というか、もっと「味わう」山登りもあるんじゃないかな、というのが私の考えですね。

立井　それに最近は、いわゆる登山ブームというのがあって、特に中高年の人に多いですよね。僕はあれはちょっと危険かなという考えがあって。もともと山登りというのは、ブームなんていうのとは無縁のものではないかと思ってるんですが。

守屋　ええ、おっしゃる通りだと思います。実は今、幸公民館で主催している中高年のための登山教室というのがあって、講師をしているんですね。そこで最初に必ず「山は物見遊山ではいけない」と話すんですよ。

立井　低山といえども馬鹿にしていると、本当に命の危険があるわけですものね。

守屋　堅苦しく言ってしまうと、私は山を生涯教育の場だと考えているんです。たとえば写真が好きな人、歴史が好きな人、俳句が好きな人、それぞれの味わいというか、楽しみ方を受け入れてくれるところですから。競争でも物見遊山でもなく、味わって登ってほしいですよね。

立井　そういえば先生は、確か立山に登ったのが最初とおっしゃってましたよね。

守屋　そうです。私は富山出身でして、越中富山に住む男は、誰もが「オラが山、立山」に登んなきゃいけない（笑）。

立井　あ、そういう言い習わしのようなものがあるんですか。

守屋　あるんですよ（笑）。十二才ぐらいの頃だったかな、私も親父に連れられてね。二泊三日コースで登りました。

立井　十二才にして立派な「越中男児」だ（笑）。

守屋　十八までに二十回は登りましたねえ。

立井　実は僕も大学の時からやってまして、最初は八ヶ岳でした。初めてアイゼンというものをつけて登ってね。あの経験は、大袈裟でなく本当に人生が変わる。物の見方が変わっちゃうんですね。山というのは凄いんだなあと、しみじみ思いましたねえ。

守屋　九死に一生を得たなんて体験をした人だと尚更でしょうね。

立井　友人と一度、剱岳から立山、槍ヶ岳、穂高と縦走した時に、帰りの電車賃がなくなっちゃいまして（笑）。しょうがないから歩荷（ぼっか）のアルバイトをしたんですよ。

守屋　ほう、歩荷をやられたんですか。それは凄い。

立井　十貫運んで千百円。それで電車賃を稼いで、余ったらピッケルを買おうなんて言いながらね。でも、帰りに松本で全部飲んじゃってなくなっちゃった（笑）。

守屋　ははは、いい思い出ですねえ（笑）。

立井　思い出といえば先生、教師をされていた頃、よく生徒と一緒に山に登られたでしょう。その子たちにとっても、山の経験は宝になってるでしょうね。

守屋　これから寒い季節になると思い出すことがあって。もうずいぶん前の話なんですが、ある男の子の生徒がいたんです。当時は集団就職なんていってた頃で、半数の子が中学卒業と同時に就職してた。彼もそうだったんですよ。

立井　「金の卵」なんて言われてもてはやされてた時代ですね。

守屋　ええ、そうですね。その子はちょっと内気なんで心配してたんですが、就職して二年も過ぎた頃の歳の暮れに、突然家に訪ねてきたんです。最初は明るく振る舞ってたんですが、時々フッと思い詰めたような表情をする。「お前、苦労してるのか」って聞いたら、涙ぐんで黙ってしまったんですね。しばらくして彼が言うには、どうやら職場でいじめにあってたようなんです。

立井　ああ、つらいですね。先生にも中々言えなかった。

守屋　それでこっちは、一応「負けずに頑張ろう」なんて教訓めいた話をしてたんですが、埒があかない。それで思わず「どうだ、久しぶりに雲取にでも登ってみるか」って言ったら、ウンと。

立井　先生、真冬の話でしょう？　大丈夫だったんですか。

守屋　もう、押入れ引っ掻き回して冬山の装備を揃えて。それで翌日、早速出発して鴨沢の登山口から登り始めたんですよ。

立井　天気はどうだったんですか。

守屋　予報ではちょっと崩れると言ってたんですけど、まあ大丈夫だろうとタカをくくってたんですね。そうしたら途中で段々雲が厚くなってきて、雪が降り始めてきたんです。そのうちに風も吹き出して、あっという間に1メートル先も見えなくなってしまった。

立井　吹雪になってしまったんですね。

守屋　猛吹雪です。で、必死で歩いていて気がついたら、後ろにいるはずの彼の姿が見えなくなっていた。

立井　はぐれちゃったんですか？　あ、まさか…。

守屋　ええ、彼の出発前の表情を見てますからねえ。もしや、とんでもないことを考えてるんじゃないかと胸騒ぎがしてきて、もう死にもの狂いで探しました。三十分ぐらい探していて、吹雪の中から彼の姿がぼんやり現われた時は、心底ホッとしましたねえ。それからザイルで体を結んで、なんとか町営の奥多摩小屋に辿り着いたんですね。

立井　彼ははぐれてしまった時、何をしてたんですか。

守屋　いや、訊きませんでした。今でもわかりませんね。まあ、それで小屋でラーメンを作って食べて、その日は休んだんです。でも寒くて、二人とも何時間も寝ないうちに目が覚めてしまって。吹雪も止んだことだし、出発することにしたんですね。ちょうど夜明け直前に山頂に着いて、東の空が紫色から赤くなってきて、太陽が昇ってきた。ご来光です。なんというか、荘厳な音楽が聴こえてくるような感じで。ただ立ちすくんでしまいました。ふと彼を見ると、頬っぺたに涙が流れてるんですね。

立井　それは感動的ですね。

守屋　下山して、帰りに駅で別れる時に、彼が「オレ、がんばるよ」って言ってくれましてねえ。

立井　自然の力というのは本当に大きいですね。本当に人間は「自然の子」なんだなと思います。

守屋　山には高いも低いもないんですね。疲れたら山に行くといい。

立井　「人間に帰る」ためにね。

真味百撰⑳ 炭火焙煎珈琲 アンデフロイデ

錦町1-1-24 永島ビル1F／529-1619
11：00〜22：00（12月中は金曜のみ18：00迄）／木曜定休

「3つの指針」を守り続けて丸3年
アートの香り漂う店内で味わう
炭火焙煎のコーヒーはまた格別

マスターの斎藤昭美さんは、この店を開くにあたって3つの指針を立てたという。それは「メニューはコーヒーとケーキのみ」、「豆は炭火焙煎」、そして「定期的に音楽会や絵画展を催する」というもの。この3つの指針を貫きながら、『アンデフロイデ』はこの12月で4年目に突入する。

メニューを増やさないのは「珈琲屋」の本道を目指すため。コーヒーの味が落ちてしまうのが怖いからだという。さすがにメニューの片隅に“紅茶”の文字が認められるが、これはダージリンのみ。あくまでもメインはコーヒーである。

そのコーヒーはストロングとソフトの2種類のブレンドをはじめとして数種類が揃う。全て紀州の備長炭を使った炭火焙煎。もともとコーヒー好きの斎藤さん、多くを試してやはり豆は炭火だという結論に達した。注文を受けて1杯つつ、70種類のカップの中から、その客の雰囲気にあったものを選んで煎れる。今日はどのカップで出てくるかと待つのも一興。

クラシックファンで自身もコーラスの活動を続けている斎藤さんは、音楽仲間を集めて店内でコンサートを企画したり、店の壁は発表の場を求める芸術家たちに解放している。ちなみに12月の予定は、4日からは志田美穂子さんの写真展、19日には高浜和英さんのピアノコンサートが予定されている。

が、やはり最大の魅力は気さくで明るい斎藤さんの人柄。カウンターは、今日もお喋りを楽しむ常連客で賑わっている。

東風

本統の登山家にお会いすると、どこか「重量感」がある。体重があるなしとは関係ない。あの大自然を相手にしていると、日常茶飯事はあまり気にならないのであろう。守屋龍男さんと対談していたら、そのことを思い出した◆北八ヶ岳にソフィア・ヒュッテという岳人あこがれの山小屋がある。昭和十年、上智大学のドイツ人神父によって建てられた朴訥な小屋で、電気もきていなければ水道があるわけでもない。それでいて、どこか岳人のこころを癒すものをもっていて、夜、ローソクの灯のもとで山日記を記すペンの走る音が響く。その中には、恋にやぶれ、ようやくこの小屋にたどりついたのだという一文もみえる。その山日記は大学の中央図書館に保管され、閲覧することができる◆そのソフィア・ヒュッテを出発し、中山峠から黒百合平にキャンプを張って明日は天狗岳登頂という前の晩、緊張と寒さで寝つけなかった。山靴の底にアイゼンという爪がはえた器具をはめ、雪山を一歩一歩登ってゆく。登頂した時の歓びは、まるで昨日の出来事のようだ。ヒラリーとテンジンがエベレストへ登頂した時の写真は高名だが、あの心境に遠からずであった◆守屋さんが「低山登山家」としてその存在が確かなのは、かつて立山、剱岳という三千メートル級の山で鍛えてきた青春に裏打ちされているからに違いない。高低にかかわらず、山は厳しい◆一山に　忘年の気や　えくてびあん

（表紙）日本画「音」西山理恵（第14回多摩総合美術展入選作品）
（編集）池田隆男　小林康史　内藤裕子　名尾居真　山田恵子　大久保清志　新井紀美子
（写真）中村伸　王朱孝平

月刊えくてびあん　第173号
平成十年十二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル6F 〒190-0012
電話 〇四二（528）〇〇八二
FAX 〇四二（528）〇〇六五
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

たみ子さんのうた

4

画・川島清子

詩・清水たみ子

うたたね

うたたねしてた、
窓下で。

風のあいまに
きこえてた、
ミシンの音は
遠くなり、

いつか、おひざの
ふきの葉の、
でんでん虫も、
いなくなり。

うたたねしてた、
窓下で。
どこか、お花が
におってた。

岩波文庫「日本童謡集」（岩波書店刊）より